

発症後、脳硬塞を併発してから、血糖の動揺と低血糖発作の頻発をみた。強化インスリン療法 (ICIT)、持続皮下注入法 (CSII) では十分な血糖制御ができず CIPII を行った。

方法：シリコン製カテーテルを腹腔内に 10cm 挿入、更に 10cm の皮下トンネルを通してニプロ社製 SP-3 持続注入ポンプに接続、basal 注入は夜間減量、bolus 注入量は各食前血糖からスライディング・スケールにより決定した。

結果：効果判定は後藤らの方法で算出した M 値を用いた。Mean±SD は ICIT が 107.0±63.5、CSII が 73.5±53.1 であるのに CIPII は 24.3±9.5 と有意に低値であり、低血糖発作も殆んど消失した。Bolus 注入後の血中 free insulin のピークは 30～60分で正常人の分泌型に類似していた。

#### 5. 糖尿病性腎症に対する FUT-175 の効果

鈴木 丈吉・小林 和夫 (長岡中央総合病院内科)  
宮村 祥二・鴨井 久司 (長岡赤十字病院内科)  
鈴木 健介  
中島 滋 (中島内科病院)

臨床的に糖尿病性腎症と診断された 8例に対し、FUT-175 (以下 FUT) を投与し、その尿蛋白減少効果をみた。FUT 10mg を維持電解質液 100～200ml に溶解し、60～90分かけて点滴静注し、原則として 2週間投与、症例により 1日 2～3回に増量した。上記の 8例に対し、のべ14回の治療を行なった。

尿蛋白は 1.8～18g/日 (5.86±4.30, M±SD) から、治療終了時 3.82±3.45, 2週後 3.29±1.86g/日と、それぞれ有意の低下を認めた。尿蛋白減少率は 37.3±15.7% で、25%以上の減少が 11治療例 (78.5%) にみられた。浮腫があった 7例中 3例で浮腫が消失した。投与後、血清総蛋白、血清クレアチニン、C4、CH 50 が有意の上昇を示した。クレアチニン上昇を示したのは、いずれも前値 1.2mg/dl 以上の症例で FUT 中止後低下している。クレアチニン上昇度と尿蛋白減少率は有意の逆相関を示した。以上、FUT は尿蛋白減少に対して有用な薬剤と考えられた。

#### 6. 糖尿病における HPLC 法による HbA<sub>1</sub>、安定型及び不安定型 HbA<sub>1c</sub> と HbF 同時測定 of 臨床的意義 (第二報)

鴨井 久司・金子 兼三 (長岡赤十字病院内科)  
荒井 興弘  
小林 幸子・島宗 良子 (同 臨床検査部)  
関野千賀子・酒井由美子  
丸山 信幸 (日本ケミファ研究部)  
加藤沢信彦 (静岡健康管理センター)

前に報告した HPLC 法による HbA<sub>1</sub>、安定型 (s-HbA<sub>1c</sub>) 及び不安定型 (1-HbA<sub>1c</sub>) と HbF の同時測定 of 糖尿病における臨床的意義について検討した。

s-HbA<sub>1c</sub> は健常人及び糖尿病患者においても空腹時、各食前食後共に有意の変化を認めず日内変動は見られなかった。1-HbA<sub>1c</sub> は同時測定 of 血糖値と良好な相関を認め、健常人及び良好なコントロール状態 of 糖尿病患者では極めて低値であった。しかし、高血糖時ならびに血糖値変動の大きい時は高値を示めた。HbF は糖尿病患者に高率に認められた。1) 本法による s-HbA<sub>1c</sub> は日内変動を認めなかったことより、従来の空腹時のみならず随時採血時でも長期 of 血糖状態の良好な指標になりうる。2) 1-HbA<sub>1c</sub> 測定は高血糖ないし血糖変動 of 有無の良好な指標になりうる。3) HbF の糖尿病における病理的意義については不明であるが、無視できない要素である。

#### 7. グリクアフィンディスポ G Hb の使用経験について

大宮 清人・小南真由美  
今井由美子・渡辺万里子 (新潟市民病院中央検査部)  
野村 裕美・棚橋 定衛  
星 京子・高島 早苗  
小形 久

1. 目的：Hb A<sub>1</sub> の測定において、測定温度、Hb F、近時の血糖値に影響を受けないアフィニティカラム法：グリクアフィンディスポ G Hb：生化学工業 (グリクアフィン) を検討したので報告します。

2. 結果：グリクアフィン法は再現性や従来法との相関も良好で、測定温度の影響もなく、Hb F や不安定型 Hb の影響も受けないと思われた。又同法による正常値も他施設と比べ同様な結果が得られ、性別、年齢差は認められなかった。

以上の結果により、グリクアフィン法は、糖尿病コントロールの示標としてより有用な方法と思われた。尚現在当検査室では本法を用いた方法で実施しているが良好な結果が得られている。しかし、いくつかの問題点がある。